



現在の奉安殿跡



戦時中の奉安殿



エ

ノ

キ

野鳥とともに生き平和を祈る大樹

田邊 利幸

(中学校教諭)

同志社チャペルの南東にエノキの大木が聳える。彰栄館で休むムクドリや京都御苑からのイカルなどの野鳥が、この木で楽しく遊ぶ。

新緑の春は、背後のチャペルの褐色とのコントラストが実によく似合う。夏に自然の秘めた力強さを知らせたこの木に木枯らしが吹く頃、舞い降りる枯れ葉が、晩秋の音を作り出す。そして、冬の降雪期、天空に放散する枝が柔らかな雪をいただいたその造形は、自然美の極を表現する。

今ではチャペルの南東になくてはならないこの木は、明治期の写真には見あたらない。しかし、戦時下の同志社の歴史とともに歩んできた生証人である。

一九三八（昭和一三）年一月二八日、このエノキの東側に「奉安殿」が建てられた。それまで彰栄館一階の北西の部屋北側に設置されていた「奉安庫」が「奉安殿」に形をかえた。これまで式典などで御真影（天皇・皇后の写真）を掲げることのなかった同志社にとって大事件であり、宗教的危機の象徴でもあった。その「奉安殿」の背景に、このエノキの枝が力強く伸びている。（写真左下）

今は、何の痕跡もない「奉安殿」の跡地を学生が賑やかな声を響かせ通過している。この百年足らずの激動の時の流れを、このエノキは「静かに」観察し、真の平和の到来を待ち望んでいる。